

日本の図書館の課題と展望: 司書補講習の試験の回答から

司書補講習の科目の一つ「図書館の基礎」では、下記の設問を設けた。

司書補講習を終えて図書館員になった際に（既に図書館員の方は、司書補講習を終えた際に）、自身が働く図書館でどのようなことに注力すべきだと思うか、自身の考えを述べよ。なお、授業中に述べた日本の図書館の課題を挙げた上で、そのような課題に対処するためにどうすべきかを具体的に回答すること（授業中に挙げたもののうち、どのようなものを選んでかまいません）

この設問は、上述の通り、現在の図書館について課題を挙げた上で、司書補講習終了後に図書館員として注力したいことを述べるものである。以下では、この設問に対する回答のいくつかを紹介する。

近年本屋が減少し、電子書籍化が進んでいる。社会の変化に伴い、図書館では電子図書館や国立国会図書館のデジタルコレクションといった電子サービスを提供している。このようにインターネットが普及していく中、図書館がどのような役割を担っていくのか。今現在図書館に勤務するにあたってこの課題は避けて通れないものである。

以前読んだ『炎の中の図書館』では、本は個人の思想であり、保管する図書館は戦争に巻き込まれてきたとある。現に授業で習ったように焚書や、宗教に関する図書・図書館が異教徒によって破壊されてきた。しかし、図書館はその度に建て直されてきた。図書館は思想の歴史が詰まっている宝庫だと筆者は述べ、これからサードプレイスとして図書館は存在し続けるだろうと締めくくる。まさに授業中に見たニュース内で紹介されていたように、今日の図書館は本以外のサービスの付加価値を設けている。武雄市図書館のコーヒー販売や明石市の保育士によるお話会、遊びに使うボールやパンを作る機械といった物の貸出、居心地の良さとして音楽や香りを提供するなど多種多様なサービス提供を行う図書館が存在している。しかし、図書館の一番の最大のメリットは、様々な人や本に触れることだと考える。地域に密着し、誰でも自由に幅広い年代が来る唯一の公共施設である。ネットで人との交流が薄れている中、コミュニティデザインという場作りの活動が盛んに行われているが、場づくりに最適な施設であるといえる。これからの図書館の在り方として岩手県の紫波町図書館のような図書館を目指していきたい。

紫波町図書館は人と本、人と人がふれあう場として「私語禁止」の張り紙は少なく、泣いている子は自ら赴いて相手をする。また展示は、今月のニュースや行事にまつわるものではなく、地元の出来事と関連した展示を行っている。それらを全て行っているのが勤務している司書である。図書館に働く者たちが、司書の本来の仕事の意義を見据えれば、人と本、人と人を結ぶ図書館が生まれるはずである。様々な図書館が取り組みを行う中で、司書としての存在を活かしたサービスを提供していきたい。

私自身が図書館員になった際に注力したいことは大きく 2 つです。1 つ目は選書に関する問題です。本講習でも「図書館の利用は個人の権利」であり、「いかなる状況のもとでも、すべての人たちに情報を提供する」という図書館の自由について言及されていました。近年でも注目されている「LGBTQ」や「うつ」「自殺」の増加など様々な問題を社会は抱えています。過激な描写に嫌悪感を抱く人も多いかもしれませんが、図書館の自由の精神に則り、そのような人が身近にいることの周知、またそうした方々の救いになるような蔵書受入、人目につかない気軽に利用できるような特設コーナーの設置に努めたいです。例えば、そこにカウンセラーの人を定期・不定期に招き、相談所のような場所に図書館が変わっていくのも面白いと思います。

2 つ目は、これからの課題に関することです。まだまだレファレンスサービスの認知の低さや図書館の信頼の少なさから利用者は増えない現状です。利用者を増やすためにも、Twitter などの SNS での発信はもちろん、動画配信などで図書館のサービスをアピールしていくことは大切だと思います。また、そのサービスの形を色々変化させていき、図書館にある資料を用いて地域の子どもたちに向けて「読書感想文の書き方講座」や青年に向けた「履歴書の書き方講座」みたいなものを開くと図書館を利用してもらうきっかけにつながると思います。1 つ目で述べたように、地域と密着し、ときには専門の方を呼んだりしながら「図書館に行けば何でも分かる！」みたいな何でも屋さんを目指してみるのも面白いと思います。また色々な理由で来館できない方のために、zoom などオンラインでそのような講座を開けば情報端末の扱いに慣れ、格差も減っていくと考えます。

既に本を目的に図書館をよく利用する方に向けては、その市の大型モールなどに返却ポストの設置や郵送システムの確立などにも注力していきたいです。とにかく一貫して言えるのは、誰でもいつでも気軽に利用でき「図書館は便利！」というようなイメージをアピールしていきたいと考えます。

そのような様々な「情報サービスのプロ」として、司書たちの専門性も高めていく必要があります。資格を持った者だけが従事できる仕事に変化していき、雇用の問題や賃金の低さなどあらゆる面を世間が見直すときが来ることを願います。

現在の日本の図書館の課題として、コンピュータの発達や情報のネットワーク化の進展に対応できる図書館員の不足を挙げたい。蔵書管理や直接サービスの提供に図書館管理システムが不可欠であるにもかかわらず、システム管理をシステムベンダの担当者任せにしている図書館もあり、全ての図書館で専任者の配置が望ましい。個々の図書館員が知識を深めるよう努めることはもちろん、職能団体等においても IT リテラシーを有する図書館員の育成のため、研修の開催等の策を講じてもらいたい。図書館員の多くが、自館で使用するシステムを理解できなければ、図書館管理システムそのものをよりよいものとするのは難しい。図書館で提供するサービスの質の向上のためにも、電子化された図書館サービスや図書館管理システムについて、継続して学んでいきたい。

匿名

(司書補講習 2021 年度受講生)

(公共図書館員になった体で書きます) 例えば地域の情報資源を収集・保存し、それを必要とする全ての人・団体に即座に提供できるように組織化・管理しておくための機関として、仮にすべての電子化された出版物が適切に組織化され、すべての人に無償で提供されるという夢のようなことがあったとしても、(公共) 図書館の存在は健全な文化の成立のために不可欠です。ましてや今、いかに「Google・Amazon の時代」であると言っても、ネットワーク上に存在する情報はまるで無秩序に散らばっているし、その中で一般の利用者がアクセス可能なものはたった数% (といってもずいぶんですが) に過ぎない上、存在する情報そのものの量が主題によって偏りがある現状、Information overload や個人の入手する情報の偏向は避けられず、すべての人が利用できる、よく整備された、偏りのない、物質として存在し、一望できることによって信頼感と落ち着きを与える公共図書館は市民の生活の傍らに是非とも必要です。しかし、これは「図書館としてあるべき」形ではあるけれども、少ない予算、不十分な人材(育成)の中、日本において大多数の公共図書館で実現できているとはお世辞にもいえません。Google・Amazon 時代が公共図書館を滅ぼすとは全く思いませんが、同時に単に貸出サービスだけに甘えているだけでは立ち行かなくなり、改めて各図書館員の専門性の水準を問いただし、個々人の努力だけでなく界限全体として改善していかなければならない段階に来ているとも思います。

一方で、今述べたような、即ち情報探索・組織化・管理能力の図書館員同士の相互教育による全体的向上や地域情報資源の蓄積の継続などは、大切なことには違いはないけれども、あまりキャッチーではなく、少なくとも短・中期的には利用者の増加を促すことにつながりそうにはありません。なので、最近よく言われるようになった、地域交流や、仕事、育児、個人的研究などのための「場」としての図書館の機能を高め、それを積極的に外部にアピールしていくことも重要です。具体的には、公共のネットワーク環境や食事スペースの整備を行ったり、地域の学校、防災機関、行政組織、大学などとのコミュニケーションを増やし、それらの団体が市民とつながる「ハブ」としての役割を公共図書館が担うシナリオを模索してすべきです。また IT を、何だかよく分からないからといって人ごとのように扱い、全く外部に委ねてしまっはいけません。

今図書館が直面している簡単ではない問題点・課題は僕が気付いていないほとんどすべてを含めて非常に多くあるのだと思いますが、これは図書館員としてというより一般論として、これが問題だ、あれが問題だと言って嘆いているだけでは何も始まりません。解決の目処が立たないから現状に文句を言うばかりで何もしないのではなく、前向きに出来ることをすべきです。

電子化が進んでいる現在、図書館としての「場」が必要なのか？という問いに対し、私は「必要です」と答えます。なぜなら図書館は本の貸出に行くだけの「場」ではないからです。

私は子供たちが「読書が楽しい」と思ってもらえるよう、絵本の読み聞かせ等の子供向けのサービスの充実に力を入れたら、来館してもらえるのではと考えました。核家族化が進み、近所付き合いが希薄になってきたと言われる現在、お母さんが 1 人で育児を行っている(いわゆるワンオペ)も多いと聞きます。1 人で子育ての不安を抱えている人に、親子で安心して出かけられる「場」として、図書館を提供し、本を通しての親子のふれあい、本との出会い、人との出会いを通して、お母さん、もしくはお父さんの不安を図書館という「場」が少しでも軽くするお手伝いが出来たらと思うのです。

また、子供は年齢と共に興味が変わり、その変化に合わせてたくさんの本を買い与えるのも大変です。そこで図書館で試し読みではないですが、たくさんの本を子供が読んで、その中の特に気に入った本を購入するという使い方も提案したいです。さらには、子供が本を読むことで、親も読書に興味を持ち、図書館の棚で偶然、昔読んだ本を見つけたり、話題になった本等を手に取り、親子で読書を楽しむようになるのではという期待します(実際に私がそうでした)。

子育てが終わった私は現在も読書を楽しんでいますが、私の読書時間は主に通勤中でした。Wi-Fi が無い電車内では電子書籍は不都合ですし、優先席付近では電源を切るのがマナーなので読めないしで、紙の本を読んでいました。ですが、文庫本すら重く感じる事や年齢と共に活字が小さくて読めない時があり、軽くて拡大して読める電子書籍は力強い味方です。しかし、私が読みたい本は電子書籍化されていない方が多いのが難点です。

老眼以外にも読書に障害がある人のためにも電子書籍が増えれば、読書を気軽に楽しむ事ができますし、図書館側としては図書館員の精神的苦痛な督促をしなくてもよくなる上に、紛失する本もなくなるので良いことづくめです。その一方で、デジタルに不馴れな方や、やっぱり読書は紙の本じゃなきゃという方もいますし、図書館に来て棚に並んでる本を見て目的とは別の「読んでみたい」と思う本に出会う方もいるでしょう。

なので私は電子化が進んでも図書館としての「場」が必要だと答えます。

子どもの読書離れ，活字離れをなくしたい。赤子のとき，幼児のときは家族が図書館に連れていってくれ，本を選んでもらったり，選ぶことが出来る。でもだんだん自分の足で，自分の意志で図書館に行けるような年齢になると，「行く子ども」と「行かない子ども」に分かれていってしまう。私の子どものクラスの子に（小学3年生），今まで図書館に行ったことがないという子がいた。幼いときに親に連れて行ってもらったことはあり，記憶がないだけかも知れないが。

そんな子を 1 人でも減らせるよう，全ての子どもたちに自分の意志で自分の読みたい本を選び，読んでもらいたい。なぜなら，本（資料）にはたくさんの魅力がある。この続きはどうなんだろうとわくわくしたり，ドキドキしたり。文字の世界で空想したり「これはなぜ」や「どうして」と思ったら別の本で調べてみたり。そういった子ども時代の知的好奇心は「自分」という人間を築き上げていく上で重要な一部であると，私は思う。そのために図書館員となり，子どもが最良の本と出会えるように働きかけていきたい。

普段，図書館を利用しない子どもにも，現図書館が行っている「クリスマス本」（年齢毎にそれぞれにあったテーマ本をプレゼント包装し貸出する）だけでなく，季節毎に中身がどんな本が入っているのか分からないように袋などに入れ，「お楽しみ本」を行ってみたり，お話会ももう少し，年齢を上まで対象に行ってみたり，それらを Twitter や広報で広げてみたり。図書館員としてやりたいことはまだまだある。けれど，何より，1 人でも多くの子どもに本に触れてもらい，そこから何かを感じ，学び，次へとつなげていけるような心広い，心豊かな人間となってもらいたい。そのために私は図書館員として全力を尽くしたい。